

駿河湾におけるタチウオ漁場形成機構の解明研究

(県単・研究期間 平成23～25年度)

担当 水産技術研究所 資源海洋科 高木 康次

【研究の背景とねらい】

- ・タチウオは本県沿岸漁業の主要な対象魚種ですが、漁獲量の変動が大きく近年減少傾向がみられ、漁業者から研究が要望されています。そのため、本研究では駿河湾のタチウオの生態を把握するとともに、漁況と漁場環境との関係から漁場形成機構を明らかにしました。

【研究成果】

- ・駿河湾内の主要9地区の漁獲量変動は地域的に連続した西部、東部、湾奥部の3つのグループに分類され(図1)、各グループの漁獲量は、東部は湾奥部より2ヶ月、西部より1ヶ月遅れ、西部は湾奥部より1ヶ月遅れて変動する傾向がみられました。
- ・駿河湾西部～湾奥部で標識放流を行った結果、タチウオは11月以降になると駿河湾西部を湾奥方向に移動する傾向が見られ(図2)、産卵のために漁場に来遊したタチウオが産卵終了により漁場を離れたと考えられました。
- ・焼津、由比、沼津の漁獲変動には50m水温、黒潮離岸距離、石廊崎潮位、気温等の環境要因が影響を与え、漁獲量の増加する条件は、水温は低め、黒潮は接岸傾向、北風は強いことでした。
- ・駿河湾内の主要なタチウオ漁場の水温は、地先定線観測の定点の0～200m水温の関係から予測可能となりました。
- ・タチウオの胃内容物には魚類が多く出現しましたが、10～12月にはサクラエビの割合が高くなることがありました。また胃内容物がみられない場合が多く、57%が空胃であった。

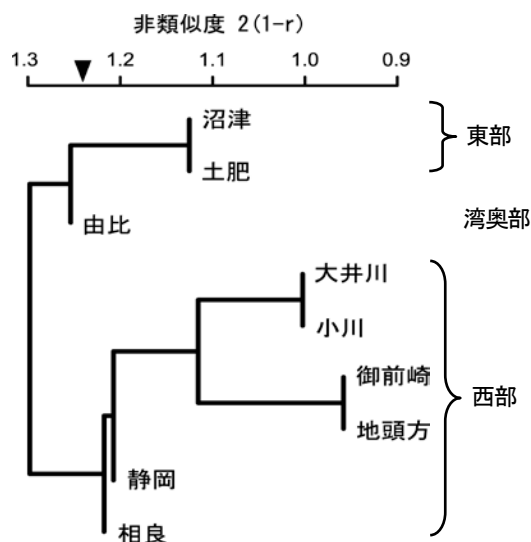


図1 漁獲量変動の類似性による分類
▼の位置で3グループに分類される。

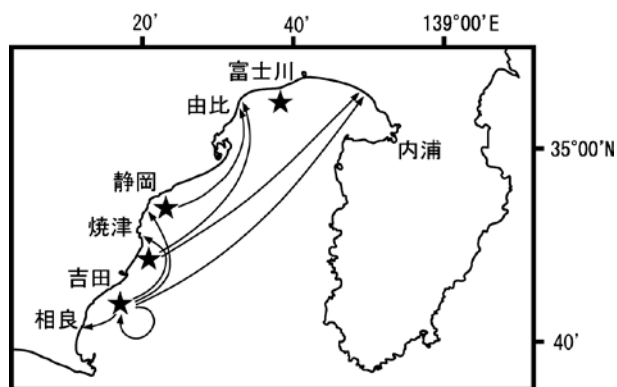


図2 タチウオ標識魚の移動

★は放流位置、駿河湾西部を湾奥方向に移動する。

【研究成果の普及方法】

- ・資源管理や漁業経営の安定につながるように、ウェブや研修会等を通じて研究成果を普及します。
(作成 平成26年3月)